「法律という武器で人々の盾になる」

布袋中学校　　桐明　依央奈

「板垣死すとも、自由は死せず。」
これは日本国民に「人権」をあたえるきっかけとなった政治家。板垣退助の言葉です。彼のこの言葉が、私の胸に深く刻まれました。いかなる権力や暴力にも屈せず、人々の自由や権利を守ろうとした板垣退助の姿は私に、ある一つの将来の夢を与えてくれました。それが「弁護士」です。現代社会において理不尽な状況に苦しむ人や自分の声を上手く上げられない人の味方となり、その人の「自由と権利」を法廷で守り抜く。そんな板垣退助のような強い信念を持った弁護士に私はなりたいと考えています。

私がこのように個人の権利や争いの解決について深く考えるようになったのは、ニュースで報道されていた社会問題を目にしたことがきっかけです。その中でも特に印象に残ったのが、日本の入管施設に収容されていたスリランカ女性、ウィシュマさんの事件でした。彼女は体調不良を訴えていたにも関わらず、十分な医療を受けられず亡くなりました。その後、国の対応が適切だったのかが裁判で争われていることを知りました。

「実際の裁判はどのように行われているのだろう。」そう思った私は、父と一緒に裁判を傍聴しに行きました。法廷に入る前は、裁判所はテレビで見るような堅苦しい場所というイメージでした。けれど、実際に足を踏み入れると、その堅苦しさは検察官や弁護士たちの激しい議論から生まれるものだと分かり、それゆえに誰もが真剣な表情で裁判に向き合っていました。その空気に触れただけでも、「ここでは人の人生や権利に関わる大切な判断が行われているのだ。」と実感し、自然と背筋が伸びる思いがしました。

特に私の心に残ったのは、弁護士が遺族の代理人として、裁判官に向けて陳情書を読み上げる場面でした。そこには法律や証拠だけでは語りきれない遺族の悲しみや苦しみが込められており、弁護士はその思いを自分自身のことのように受け止めながら、一つ一つの言葉を大切に伝えていました。その姿を見て、弁護士は法律を扱うだけの仕事ではなく、依頼人の気持ちに寄り添い、その思いを社会へ届ける大切な役割を担っているのだと感じました。私も、苦しんでいる人の声を代弁し、その人が前を向いて歩いていけるよう支えられる弁護士になりたいと強く思いました。

さらに、法廷では、張りつめた空気の中で、一つ一つの言葉に重みがありました。弁護士は証拠や法律を根拠に主張を組み立て、相手の意見にも耳を傾けながら議論を進めていました。私はその姿を見て、「人を助けるためには、ただ感情だけではなく、確かな知識と論理が必要なのだ」と感じました。

一つの言葉や証拠が判決につながっていく様子を目の当たりにしました。その空気に引き込まれ、「もっと裁判について知りたい」「法律を学び、人を支える仕事がしたい」と強く思うようになりました。この経験が、私の弁護士という夢をより確かなものにしてくれました。

この裁判を傍聴してから、私は社会で起きる出来事を「法律」という観点から考えるようになりました。ニュースを見れば、大人たちの間でも日々多くの争いや自分たちの力だけでは解決できない理不尽なトラブルが起きています。言葉が足りずに損をしてしまう人や、弱い立場に置かれて苦しんでいる人の姿を見るたび、私は胸が痛み

ます。裁判を傍聴した経験を通じて、私も社会で困っている人の力になりたいと強く思うようになりました。大人たちの複雑な争いを公平に解決するためには、感情論ではなく、誰もが従うべき「法律」という正しいルールが必要です。法律という武器を駆使し、筋道を立てて人々を救うことこそが、弁護士の果たすべき大切な役割なのだと確信しました。

弁護士になるためには、これから人一倍真摯に、長く勉強を積み重ねていかなければなりません。しかし、どんな困難な壁にぶつかったとしても、私は板垣退助のように自分が信じた正義のために決して諦めず、努力を続けていくつもりです。まずは身近な学校生活や家庭の中で、人の話をより深く聞き、物事をさまざまな方向から捉える力を磨いていきたいです。そして将来は、「あの人に相談して本当によかった」と多くの人から信頼され、人々の平和を守れる弁護士になりたいです。